鳥取県佐治村
佐治村内遺跡発掘調査報告書
佐治村教育委員会

鳥取県佐治村

佐治村内遺跡発掘調査報告書

1990

佐治村教育委員会

序　　文

佐治村は、鳥取県東南部山地帯にあり、八頭郡の西南部に位置し、奥部を岡山県に接する東西に細長くのびた山村であります。

村内には予見される数箇所の埋蔵文化財指定区域を設けておりますが、平成２年度以降村内開発に係る、村道新設工事或いは県営佐治地区ほ場整備事業等が計画実施されるにあたり、前述指定区域に関わりをみるところとなり、刈地鳥居原遺跡、葛谷遺跡、イヤノ谷遺跡を夫々に試掘調査の上、遺構の有無、土層推堆状況、遺跡の範囲等について確認に努めました。

調査の結果、今回の発掘現場よりは、本体にずれが予測されるものもあったが、刈地鳥居原遺跡が新らたに確認されるなど、一応の成果は得られたものと調査に意義を感じております。

調査終了にあたり、ご指導を得ました県文化課、県埋蔵文化財センター、とりわけ県埋蔵文化財センター田中精夫係長、中村徹文化財主事のご指導、ご助言、また土地所有者の方をはじめ多くの関係者の方々にご理解とご協力に対し厚くお礼申し上げます。

平成２年３月

鳥取県八頭郡佐治村教育委員会教育長

西　尾　隆　昌

例　　言

1．本報告書は、鳥取県埋蔵文化財センターの指導、協力のもとに、佐治村教育委員会が行った、県営佐治地区ほ場整備事業及び村道新設工事等に伴う発掘調査報告書である。

2．この調査は、佐治村大字刈地字鳥居原に所在する刈地鳥居原遺跡、佐治村大字葛谷字村ノ内に所在する葛谷遺跡、佐治村大字畑字イヤノ谷ジンゴウに所在するイヤノ谷遺跡の試掘調査である。

3．調査期間および調査体制は下記のとおりである。

調査期間　平成元年11月29日～12月25日

調査体制　調査責任者　西尾隆昌（佐治村教育委員会教育長）

調査指導　　田中精夫、中村徹（鳥取県埋蔵文化財センター）

調査事務局　小林真知子（佐治村教育委員会）

調査担当者　奥田哲実、中島嘉吉、竹本浩一、小谷ちえ子（佐治村教育委員会）

4．本報告書の作成にあたっては、次の方のご教示を賜った。

赤木三郎（鳥取大学教授）、中原斉（鳥取県埋蔵文化財センター）、原田雅弘、加藤誠司（鳥取県教育文化財団）

5．本報告書の編集は、埋蔵文化財センター田中精夫指導係長(執筆も賜る)、中村徹文化財主事の指導と支援を受けて、奥田が行った。

6．本報告書における挿図等の扱いは下記のとおりである。

(1)挿図中の方位はすべて真北である。

(2)挿図中の水平基準の数値は海抜標高である。

7．本調査の遺構、遺物の実測図、写真、出土遺物等の資料は、佐治村教育委員会に保管されている。

目　　次

序　文
例　言
頁
第１章　序章……1
　第１節　位置と歴史的環境……1
第２章　刈地鳥居原遺跡……4
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　調査の経過と方法……4
　第３節　位置と環境……4
　第４節　調査内容……5
　第５節　佐治四郎…（田中精夫）　7
第３章　葛谷遺跡……9
　第１節　調査に至る経緯……9
　第２節　調査経過と方法……9
　第３節　位置と環境……9
　第４節　調査内容……10
第４章　イヤノ谷遺跡……13
　第１節　調査に至る経緯……13
　第２節　調査経過と方法……13
　第３節　位置と環境……13
　第４節　調査内容……14
第５章　まとめ……16
　第１節　奈良時代の佐治村
……（田中精夫）　16
　第２節　むすび……19

表　目　次

第１表　土器観察表……15

挿　図　目　次

挿図１　遺物実測図……2
挿図２　村内遺跡図……3
挿図３　刈地鳥居原遺跡周辺地形図…4
挿図４　刈地鳥居原遺跡トレンチ配置図
……5
挿図５　遺物実測図……6
挿図６　トレンチ平面・断面図……6
挿図７　佐治四郎墓所周辺実測図……7
挿図８　宝筐印塔……7
挿図９　佐治四郎の墓所……8
挿図10　葛谷遺跡周辺地形図……9
挿図11　遺物実測図……10
挿図12　遺物実測図……11
挿図13　遺物実測図……12
挿図14　イヤノ谷遺跡周辺地形図……13
挿図15　イヤノ谷遺跡トレンチ配置図14
挿図16　土層断面図……14
挿図17　遺物実測図（石棒）……15
挿図18　佐治郷図……16
挿図19　因幡国郡配置八上郡智頭郡の郷
……17

図　版　目　次

図版 1　鳥居原・イヤノ谷遺跡全景…20
図版 2　葛谷遺跡全景他……21
図版 3　佐治四郎墓所……22
図版 4　遺物写真……23
図版 5　遺物写真……24

第１章　序章

第１節　位置と歴史的環境

刈地鳥居原遺跡は、鳥取県八頭郡佐治村大字刈地字鳥居原に所在する。遺跡は佐治川を千代川との合流点から３㎞ほど遡って、県道江府中和用瀬線より刈地部落へ100ｍ入った地点の河岸段丘上の標高115ｍの地点の水田下に位置し、すぐ近くには、佐治四郎の遺跡が存在する。

葛谷遺跡は、鳥居原遺跡の対岸、大字葛谷字村ノ内葛谷部落の中心部に位置する。

イヤノ谷遺跡は、さらに佐治川を6.5㎞ほど遡った、右手の緩い斜面上、大字畑字イヤノ谷ジンゴウに所在し、県下でも数少い貴重な石製遺物である石棒の出土地である。

佐治村は海抜600ｍから1,200ｍの中国山地の脊稜部を構成する山脈に囲まれた谷間で、住民は東西方向につづく狭長な谷底平地と僅かに広がった台地の上に居住し、そこから南北に続く山地斜面を利用した梨栽培を営んでいる。村内の地質は佐治川中部以奥は古生代の深成岩が広く分布し、名石「佐治川石」の産地となっている。また佐治川下流には中生代白亜紀の花崗岩が分布しており、この地域の古墳はこの種の石材を用いている。このような狭少な地理的環境にも拘らず、村内には縄文時代中期末頃から歴史時代に至るまでの各時代の遺跡が存在している。

縄文時代の遺跡は、葛谷遺跡、イヤノ谷遺跡のほかに、葛谷遺跡から2.5㎞ほど佐治川を遡った右手、標高560ｍの飯盛山の南斜面に磨製石斧が出土した犬段遺跡がある。

弥生時代の遺跡は中期からあり、佐治川南岸の河岸段丘上にあった大井３号墳を発掘調査した際、中期から後期の弥生土器、柱状片刃石斧、石包丁が出土している。この石包丁の出土で、平野が極めて少ない山間部でも、水田耕作を行っていたことが分かる。そのほか、大井の金銭原遺跡、聖坂遺跡や高山の一軒原第３遺跡からは、後期ごろの弥生土器が出土している。一軒原第３遺跡は、千代川から奥に８㎞も入りこんだ標高300ｍの山地にあり、弥生時代の人々の開拓精神の旺盛さがしのばれる。

古墳時代の遺跡は、大井聖坂遺跡、一軒原遺跡、同第２遺跡、同第３遺跡、同第４遺跡、金鋳原遺跡、葛谷遺跡、葛谷古墳群、大井古墳群、高山古墳群、貝尻古墳がある。出土遺物からみて、古墳出土のものと考えられる遺物もあるが、集落出土か古墳出土か、詳細については不明である。古墳は10基みつかっているが、いずれも後期古墳で、佐治川沿いに開けた４箇所の沖積地に分布している。この中で葛谷地域の古墳群（４基）が最も大きい。おそらく古墳時代においては、佐治川の沖積地を活動の舞台とした小集団が幾つか成立し、その首長墓が各地域に築かれ、なかでも葛谷地区は有数の勢力であったのであろう。一方、佐治川の対岸には大井３号墳を首長墓とするもう一つの勢力があった。それは、須恵器蓋

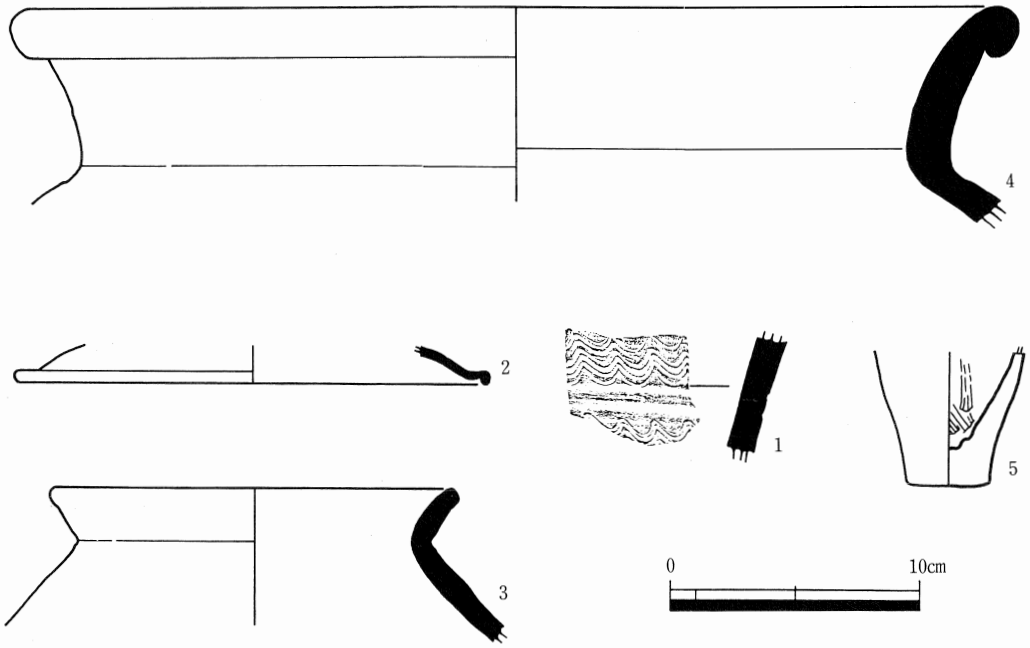
坏、高坏、壺、平瓶を始めとして、直刀、刀子、碧玉製管玉、ガラス製小玉、切小玉、耳環などの武具、供膳土器、装飾品が見つかった大井３号墳の出土品から知られる。

歴史時代の遺跡は、大井聖坂遺跡、貝尻遺跡、刈地鳥居原遺跡、寺ノナル遺跡、屋敷遺跡、大井経塚、鎌倉時代の地頭佐治四郎墓地などがある。

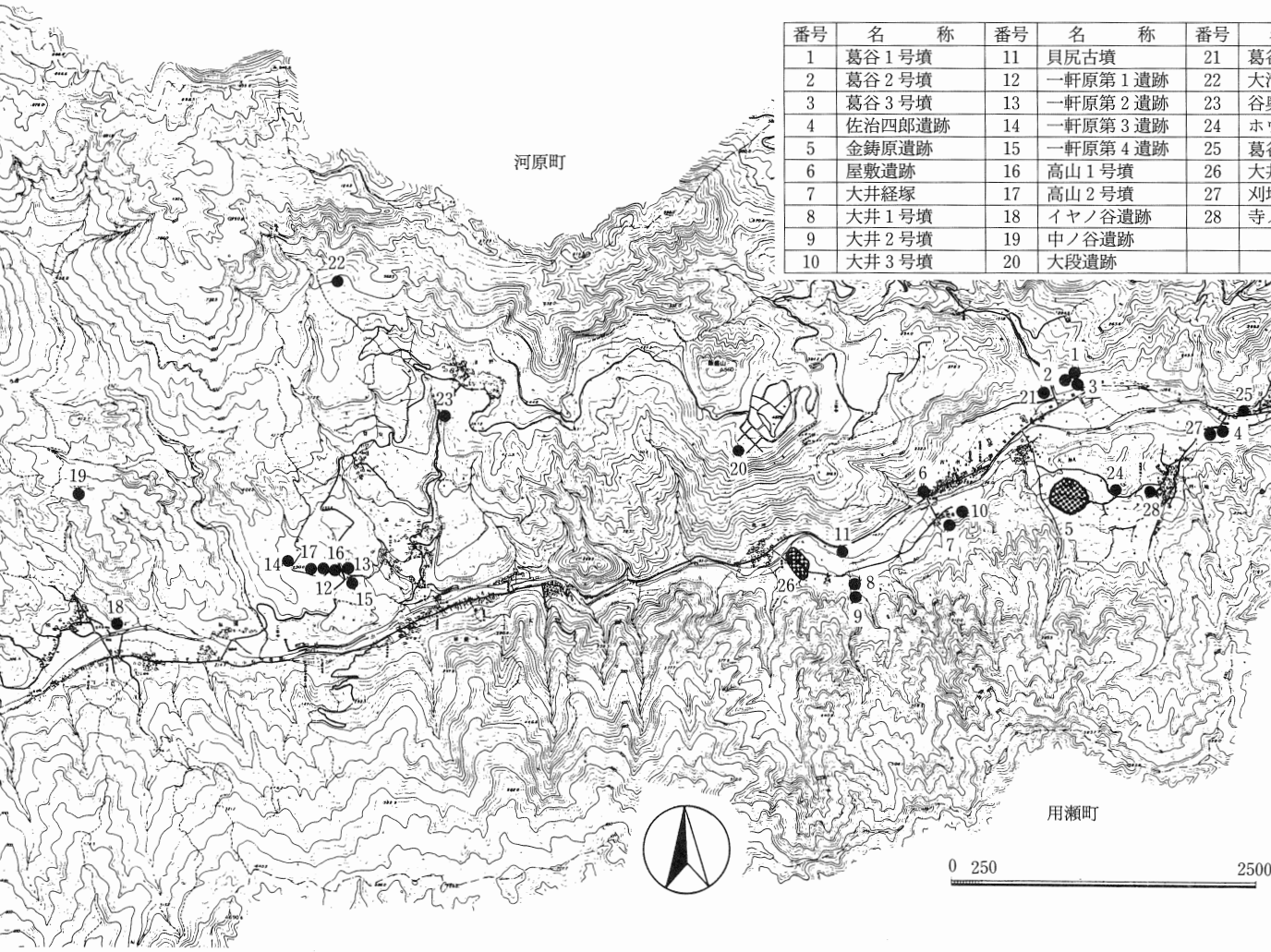
以上の遺跡のほとんどが、佐治川中流域から下流域にかけて分布するが、佐治川との高差が100m以上の台地上に存在するものもある。換言すれば、村内の遺跡の分布は古市周辺の沖積地及び高山周辺の台地上に集中しているといえる。これらの遺跡は現在も村内の代表的な耕地で、水田耕作、畑地、果樹園等幅広い農地利用がなされており、古代においては恰好の生活環境であったことが想像される。

村内の遺跡分布は現在のところ28箇所であるが、クロボコの堆積したいくつかの台地の存在、峠を越した岡山県の恩原遺跡との関連、早くから平野部の開墾が進み、水田下に埋もれている集落遺跡や破壊された古墳のある可能性を含んでいることなどから、まだまだ村内の遺跡数は、増加するものと思われる。

参考文献　鳥取県埋蔵文化財シリーズ１～４
大井３号墳発掘調査報告書
葛谷４号墳発掘調査報告書
佐治村誌



第１図　最近みつかった貝尻・寺ノナル遺跡出土土器



番号	名　　称	番号	名　　称	番号	
1	葛谷１号墳	11	貝尻古墳	21	葛
2	葛谷２号墳	12	一軒原第１遺跡	22	大
3	葛谷３号墳	13	一軒原第２遺跡	23	谷
4	佐治四郎遺跡	14	一軒原第３遺跡	24	ホ
5	金鋳原遺跡	15	一軒原第４遺跡	25	葛
6	屋敷遺跡	16	高山１号墳	26	大
7	大井経塚	17	高山２号墳	27	刈
8	大井１号墳	18	イヤノ谷遺跡	28	寺
9	大井２号墳	19	中ノ谷遺跡		
10	大井３号墳	20	大段遺跡		

第２図　村内遺跡図

第２章　刈地鳥居原遺跡

第１節　調査に至る経緯

県営佐治地区ほ場整備事業が平成２年度刈地鳥居原地区に実施が計画されている。当該地は、鎌倉時代の地頭佐治四郎の遺跡に近接しているため、遺構の有無、遺物の散布状況等を確認し、工事との調整を図るため試掘調査を実施することとした。

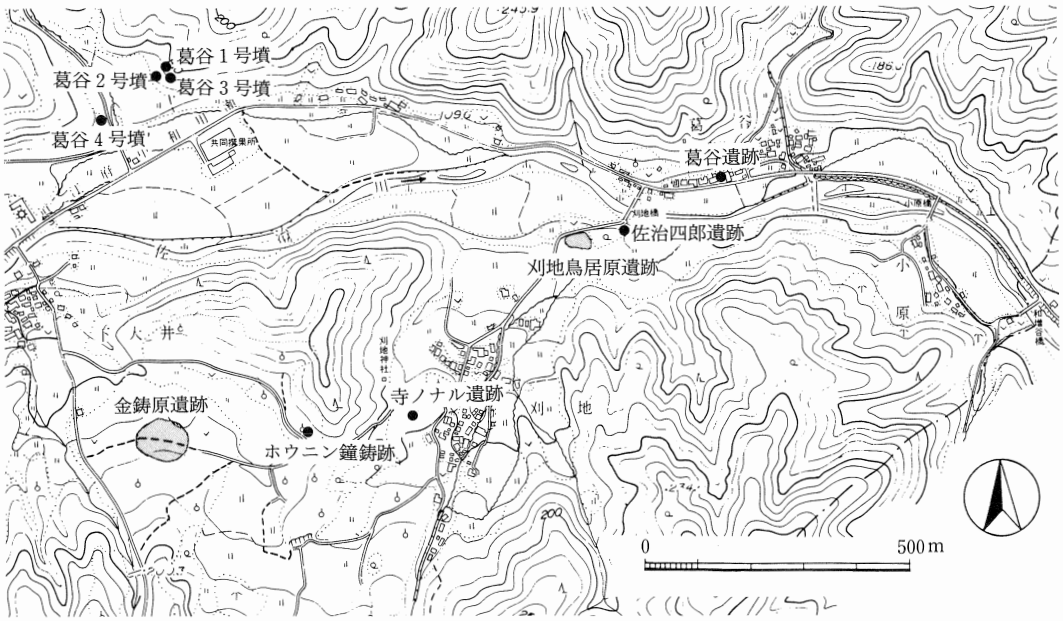
第２節　調査の経過と方法

調査は平成元年11月29日から開始し、平成元年12月21日までの間、延13日間を要して現地作業を行った。調査地は、水田、畑地となっており、地形や周辺遺跡、工事図面等を考慮しながら、長さ５ｍ、幅２ｍのトレンチ12本（Ｔ１～Ｔ12）を設定して発掘した。発掘面積は120㎡である。

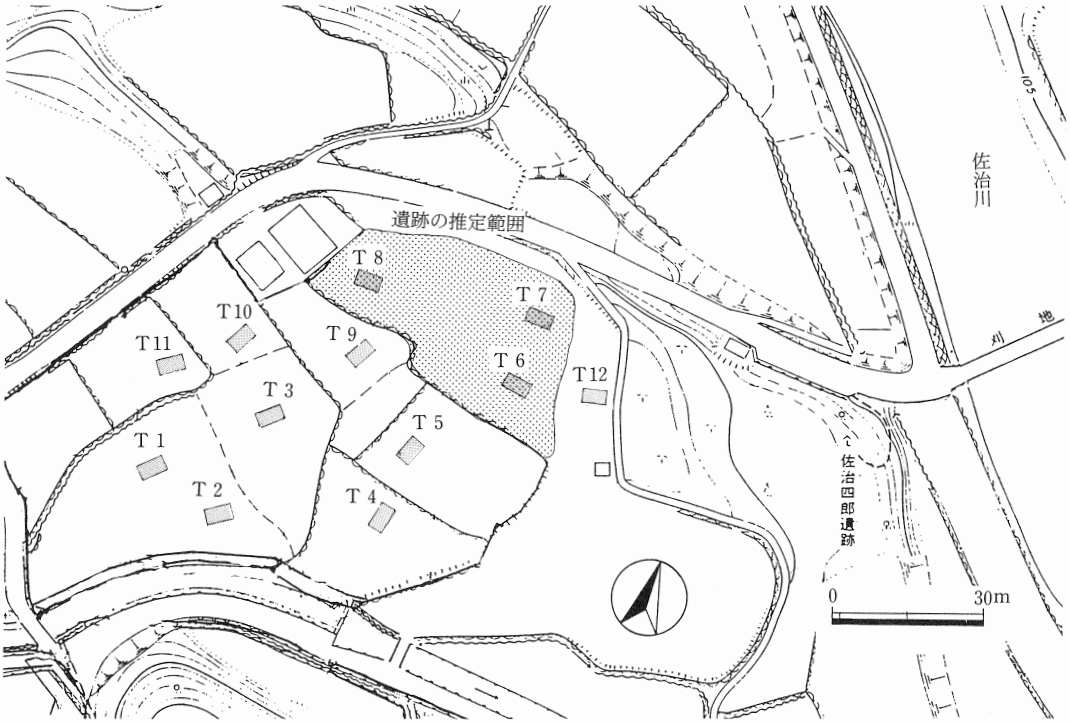
第３節　位置と環境

調査地は、佐治四郎遺跡が所在する東西に伸びる丘陵に近接している。佐治四郎遺跡は、佐治氏代々の居城の跡とされ、佐治四郎の墓所とも伝えて、貴重な遺跡である。

調査地周辺には、縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が存在している。対岸の葛谷遺跡では、縄文時代中期末から後期、弥生時代末期から古墳時代前期、奈良時代と三つの時期の遺物が確認されている。また、金鋳原遺跡では、弥生時代後期の遺物が出土しているし、最近あらたに寺ノナル遺跡もみつかった。いずれの遺跡とも代表的な宅地、耕地であり、古代においても恰好の生活環境であったのであろう。



第３図　刈地鳥居原遺跡周辺地形図



第４図　刈地鳥居原遺跡トレンチ配置図

第４節　調査内容

調査は、すべての水田にトレンチを設定して行った。

・Ｔ１、Ｔ４は土層が同じで、表土、床土、赤茶褐色砂質土、暗茶褐色砂質土の順であった。どちらも遺構は確認できなかったが、土師器、須恵器数片を検出した。

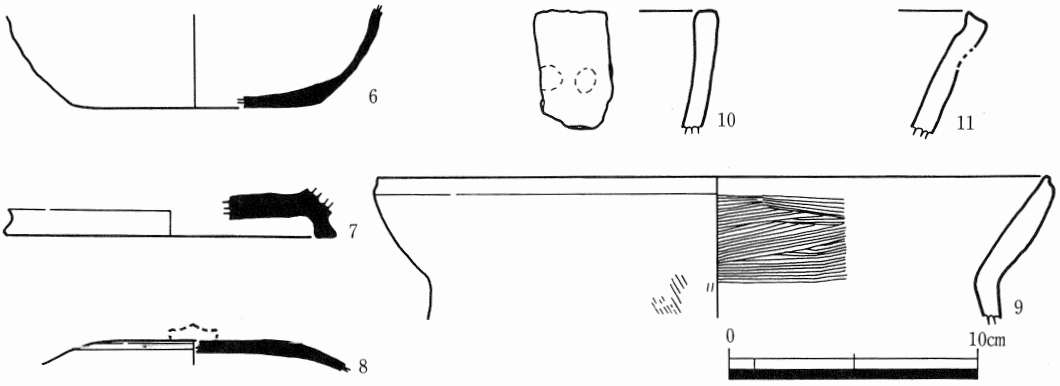
・Ｔ２、Ｔ３も土層が同じで、表土、床土、暗茶褐色砂質土、明茶褐色砂質土の順で少し大きめの河原石が多く出た。遺構は確認できなかったが、いずれのトレンチからも少量ではあるが土師器と須恵器を検出した。また、水晶の原石も検出した。

・Ｔ６、Ｔ７、Ｔ８では、遺構を確認することが出来た。いずれもピットで、Ｔ６で２基、Ｔ７で３基、Ｔ８で２基で、大きさは40～50cmほどのものであった。遺構は奈良時代の須恵器、土師器で、どのトレンチからも検出したが、特にＴ７のピットから多く検出した。遺構検出面は灰茶褐色砂質土で埋土暗褐色のピットであった。

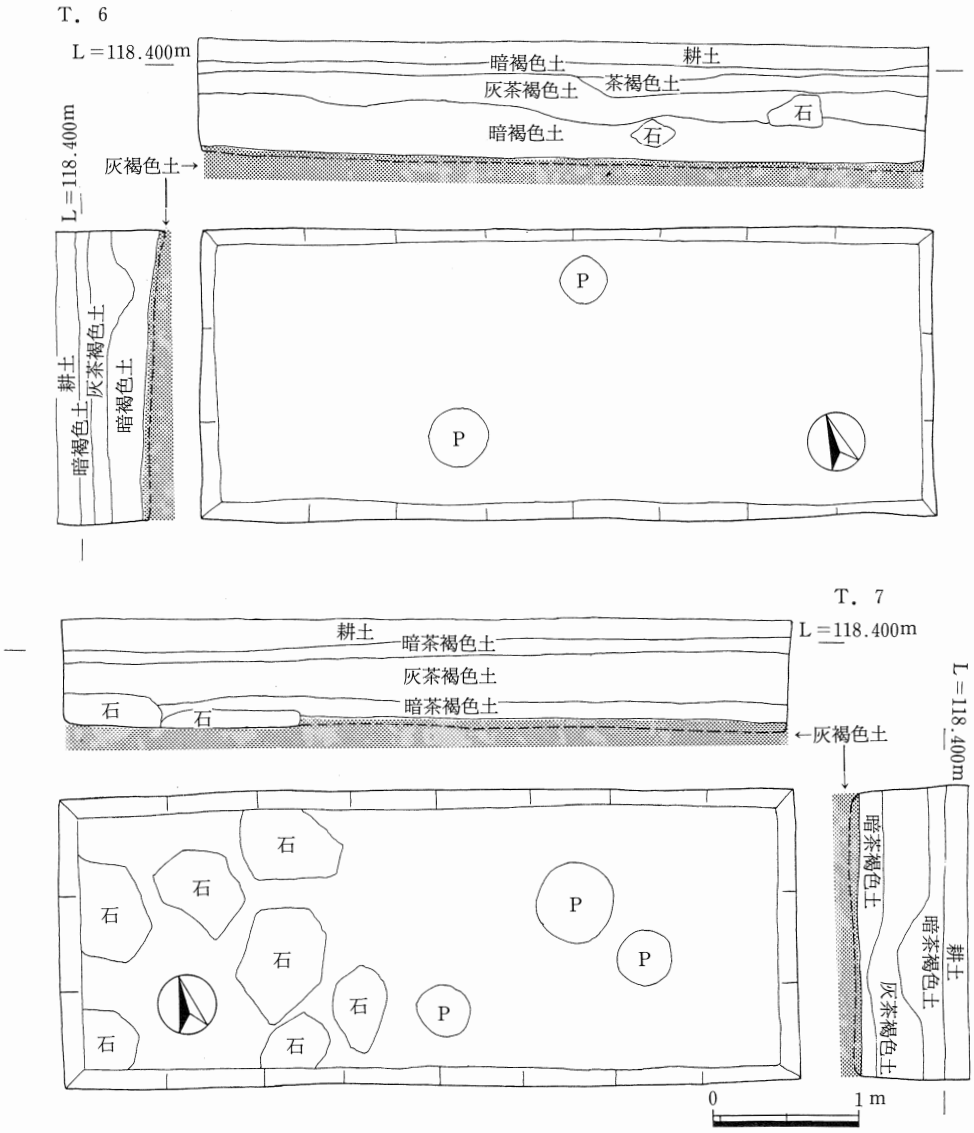
・Ｔ９、Ｔ10、Ｔ12では、遺物は検出したが、遺構は確認されなかった。

・Ｔ５、Ｔ11は、遺構、遺物とも検出しなかった。

今回の調査では、３つのトレンチで遺構（ピット）を確認した。出土遺物が奈良、平安時代のものであることから、佐治四郎遺跡（鎌倉、室町）とは別の集落遺跡であろうと思われる。遺跡の規模は、試掘結果、地形などを考慮し、約1,100㎡であろうと推測される。佐治四郎遺跡の石積み基壇の実測も行った。

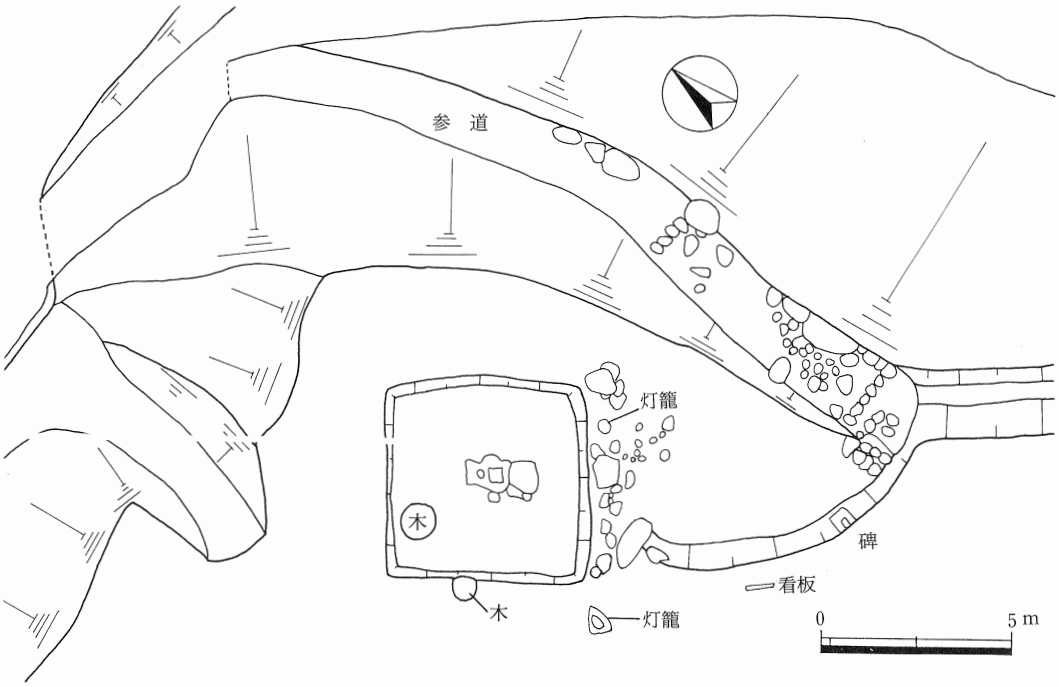


第５図　刈地鳥居原遺跡出土土器



第６図　トレンチ平面・断面図

第５節　佐治四郎の遺跡

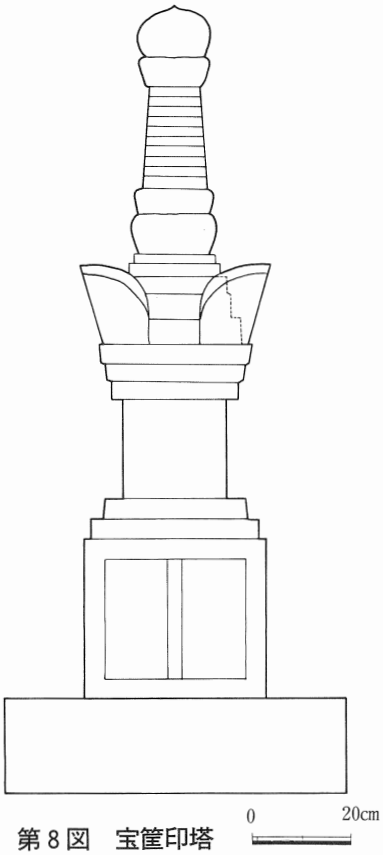


第７図　佐治四郎墓所周辺図

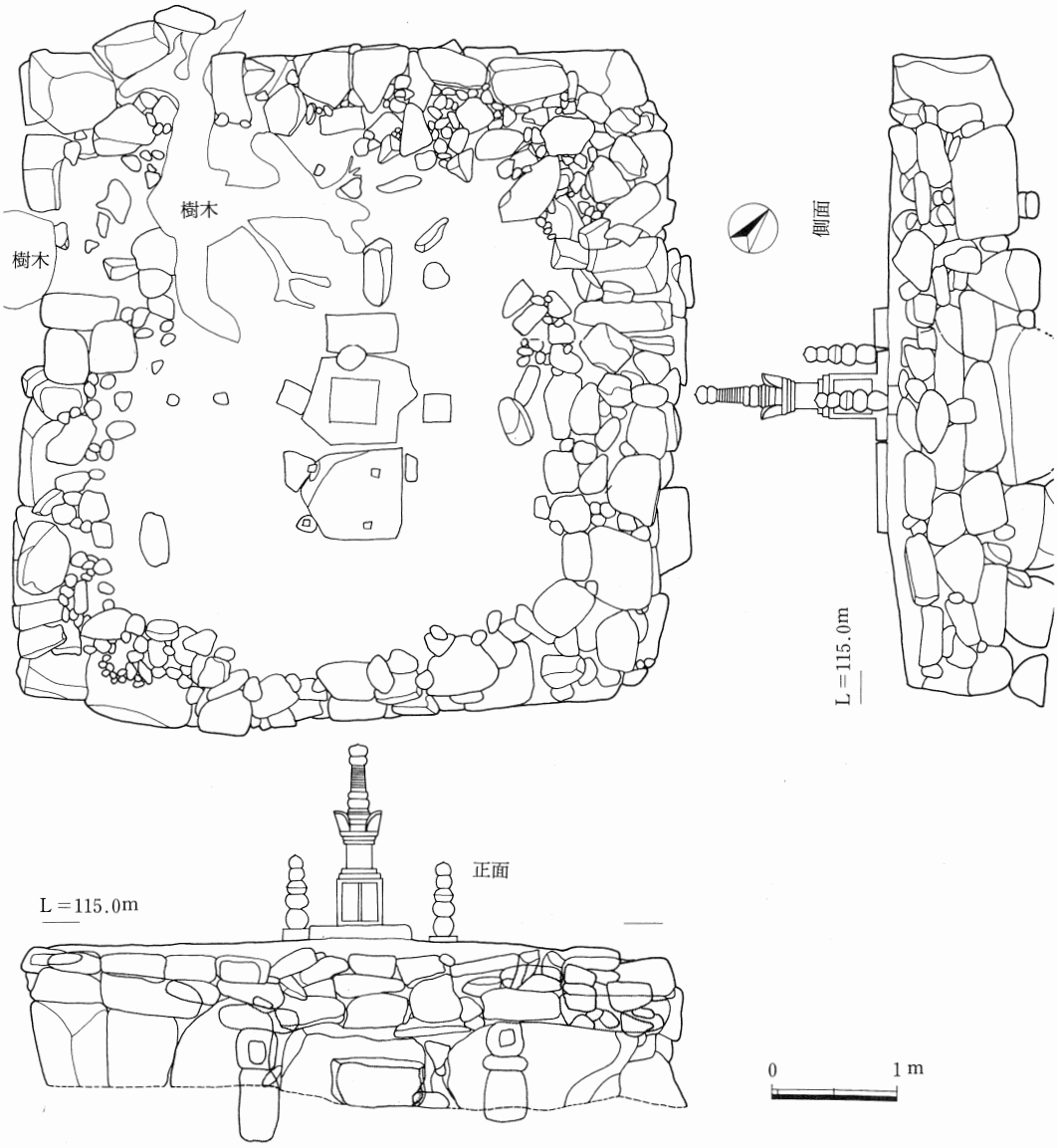
佐治四郎とは、鎌倉時代初期、佐治郷に在住した領主のことで、正しくは佐治四郎重貞という。重貞は、建暦３年（1213）因幡国御家人として佐治郷地頭職を安堵された。以後、一族はこの刈地地区を拠点として、最奥部の栃原に至るまで本格的に佐治郷を開発したといわれている。佐治氏の存続は、古文献により、文和４年(1355)、大阪府高槻市で起きた神南合戦の頃まで実在していたことがわかっている。また当地に残る墳墓の築成は、江戸時代の文献『因幡志』に作者の描写したスケッチが残っていることから、江戸時代以前であることは間違いない。

さて、墳墓の位置は、佐治川沿いに張り出した丘陵端部にあり、口佐治の谷底平野が見渡せる好位置である。墳墓は、地元で「切明大明神」として祀られ、墳墓上に祠、祭壇、灯籠などの施設が付設されている。

この墳墓は、その構造、石造物などから、室町時代後期に築造されたことがうかがえる。



第８図　宝筐印塔



第９図　佐治四郎の墓所

つまり、墳墓は、石積み基壇とその上の宝筐印塔、五輪塔群からなる。基壇の大きさは一辺が5.1mの方形で、高さは中央で1.2m、両端部で1.1mを測る。石積構築法は、基底部を広口積み、２段目以上は小口積みで、２、３段積まれている。墳丘側面は、これらの石積みで強固に整形され、墳頂部は15cm程の河原石を敷きつめ、平坦に仕上げられている。頂部中央に厚さ10cm程の台石が３枚置かれ、その上に高さ138.5cmの宝筐印塔、高さ55cm程の五輪塔３基が立ち並ぶ。台石下の埋葬施設の存在は不明である。

宝筐印塔の基礎は、１面輪郭付格座間入り。方柱の塔身の正面には梵字が彫り込まれていたようであるが、今は見えない。笠は下２段、上５段。隅飾りの比率は1.78と高く、九輪の線刻の彫りは浅い。室町時代末期の様式とみられる。

第３章　葛谷遺跡

第１節　調査に至る経緯

佐治村大字葛谷在住の山下槌晴氏より宅地造成の希望があった。該当地域では、昭和58年に山下氏が水田用の土とりを行ったところ数片の縄文中期の土器が出土している。そこで、今回の造成分について、遺構、遺物の有無を確認し、工事との調整を図るため事前の試掘調査を実施することとした。

第２節　調査の経過と方法

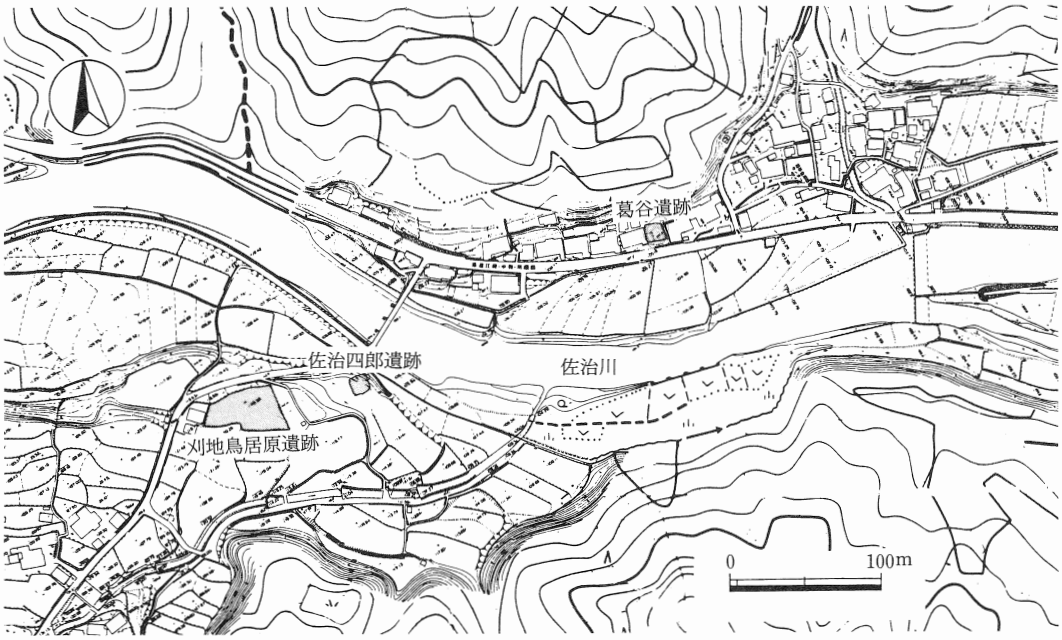
調査は平成元年12月４日から開始し、平成元年12月18日までの間、延８日間を要して現地作業を行った。調査地は畑地となっており、地形や周辺遺跡、造成計画等を考慮しながらトレンチを設定して発掘した。発掘面積は20㎡である。

第３節　位置と環境

調査地は、佐治川を千代川の合流点から2.5kmほど遡った右手、佐治村大字葛谷字村ノ内葛谷の集落の中央付近にあり、対岸には、奈良時代の刈地鳥居原遺跡、鎌倉時代の地頭佐治四郎の遺跡などがある。また、調査地より県道江府中和用瀬線を１kmほど遡った地点、佐治川谷底の平地と山地斜面との接点あたりに葛谷古墳群（４基）が存在する。

葛谷遺跡は、昭和58年に発見された遺跡で、口が大きく波打った縄文中期の深鉢などがみつかっている。

遺跡は、佐治村の最も東、八頭郡用瀬町に近接する。



第10図　葛谷遺跡周辺地形図

第４節　調査内容

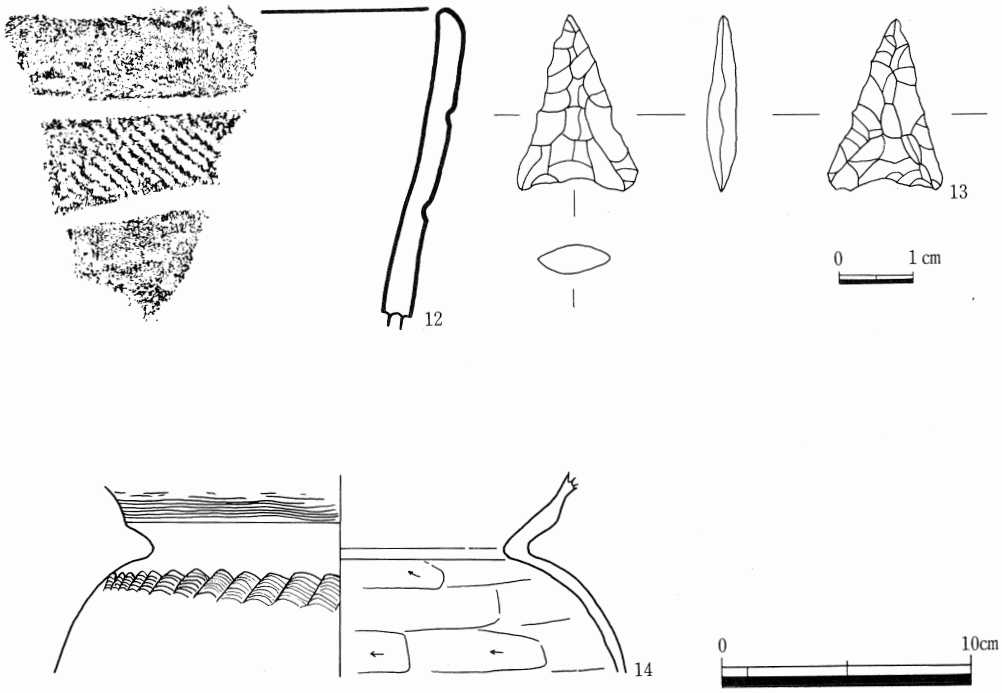
調査は、山下氏裏の畑及び庭の縄文土器発見箇所にトレンチを設定して行った。

土層堆積は、表土、暗褐色砂礫土、褐色砂礫土の順であった。縄文土器２点、石鏃、奈良時代の須恵器などを検出した。また、山下氏より以前出土した土器の提出もあった。遺構が確認されなかったことから、遺物は周辺からの流れ込みか、かつては生活面があったであろうが、宅地造成時にかく乱されてしまった可能性がある。

昭和58年の出土遺物、今回出土遺物をみると、須恵器（奈良時代）、土師器（古墳時代）、石鏃、縄文土器（縄文時代中期～後期）と各時期のものが出土している。

遺構が検出できなかったのは非常に残念であるが、出土遺物などから、縄文時代中期から後期、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良時代、以上３つの時期の遺跡であることが推測される。

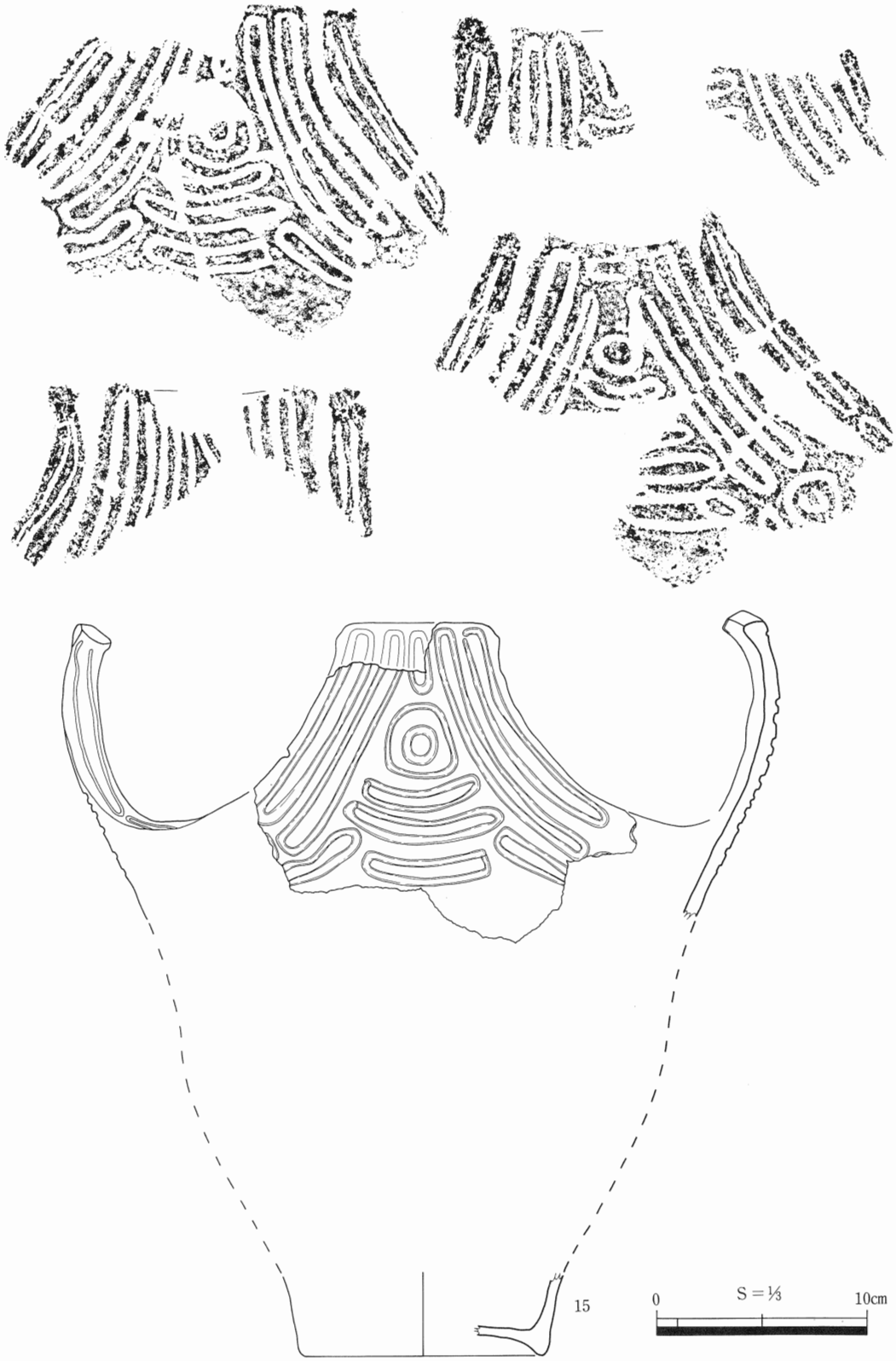
遺跡全体としては、宅地造成時及び県道新設時にかく乱された可能性が強いが、まだ宅地の下に眠っている部分もあることが考えられる。



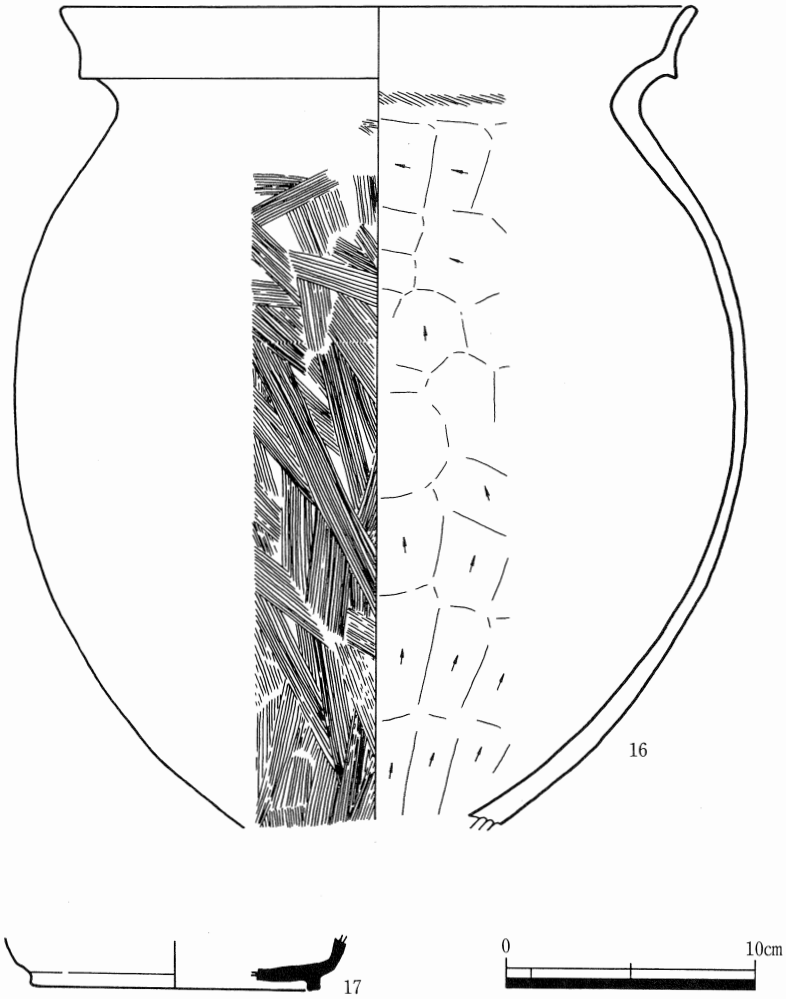
第11図　葛谷遺跡出土土器・石器

中津式縄文土器（縄文後期前半）

太い沈線と幅広な磨消縄文帯を有す典型的な中津式土器である。器種は深鉢で、その形態から波状口縁とみられる。口縁部は肥厚せず、端部に縄文帯は施されない。



第12図　有文深鉢（縄文土器）



第13図　古墳・奈良時代土器

縄文土器・有文深鉢

葛谷遺跡から出土した縄文土器は、突起状の大きな山形口縁を有する深鉢形土器である。昭和58年の土取り作業中に採集された破片に今回の発掘調査で出土した破片を併せて復元実測を行った。口縁部山形の頂部が平坦になるもので、破片数から４つの山形が確認できる。突起部の端部は上・側面が肥厚して幅1.5cm前後の面をなしている。器形は胴部が大きくくびれるもので、底部は底径11.2cmを測る上げ底となっている。文様は口縁部付近に限定されるようであり、突起部外面と突起部間に円ないし二重圏を幅４mm前後の沈線で描き、その周りに細長い長楕円形の区画沈線文が配されている。県内の類例としては鳥取市桂見遺跡第Ⅲ群土器のⅡ類深鉢ａがあり、最近では福部村栗谷遺跡でも出土している。これらは京都市北白川追分町遺跡における深鉢Ｃ類に属するもので、北白川Ｃ式の範ちゅうでとらえられ、中期末段階のものであろう。　（中原　斉）

第４章　イヤノ谷遺跡

第１節　調査に至る経緯

平成２年度より、佐治村大字福園、畑地区に村道北岸線道路新設工事が計画されている。工事施工区域は、イヤノ谷遺跡に近接しているため工事を担当する建設課より照会があった。当遺跡では縄文時代後期のものと思われる石棒（鳥取県立博物館蔵）が見つかっている。教育委員会では遺構の有無、遺物の散布状況を確認し、工事との調整を図るため、試掘調査を実施することとなった。

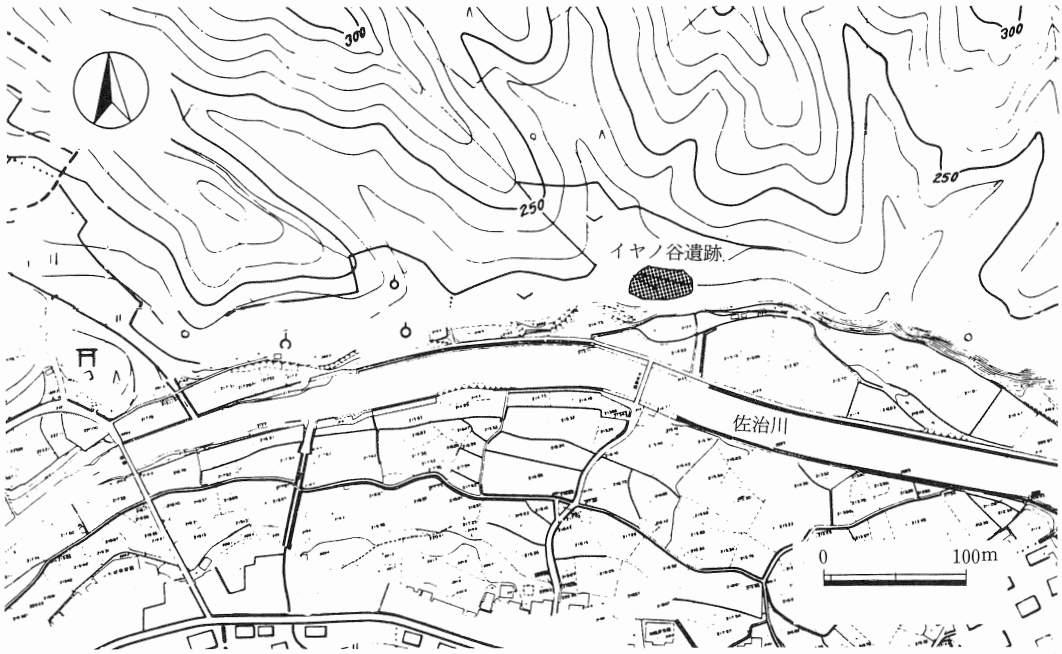
第２節　調査の経過と方法

調査は、平成元年12月15日から開始し、平成元年12月25日までの間、延８日間を要して現地作業を行った。調査地は畑地（果樹園）となっており、地形や周辺遺跡の立地を考慮しながら石棒出土地を中心にトレンチを設定して発掘した。調査面積は62㎡であった。

第３節　位置と環境

調査地は、佐治村大字畑字イヤノ谷シンゴウにあり、佐治川の北岸河岸段丘上標高225mに位置する。イヤノ谷遺跡では、昭和42年に石棒のみが採集されている。この石棒は緑泥片岩製で長さ33.6cm、一端の把頭が扁平なほぼ球形のえぐりを入れ表面はなめらかに磨かれている。縄文時代後期と考えられるもので、県下でも数少ない貴重な石製遺物である。

イヤノ谷遺跡よりさらに斜面を北に登った標高400mの地点に、須恵器等の出土で知られる中の谷遺跡がある。



第14図　イヤノ谷遺跡周辺地形図

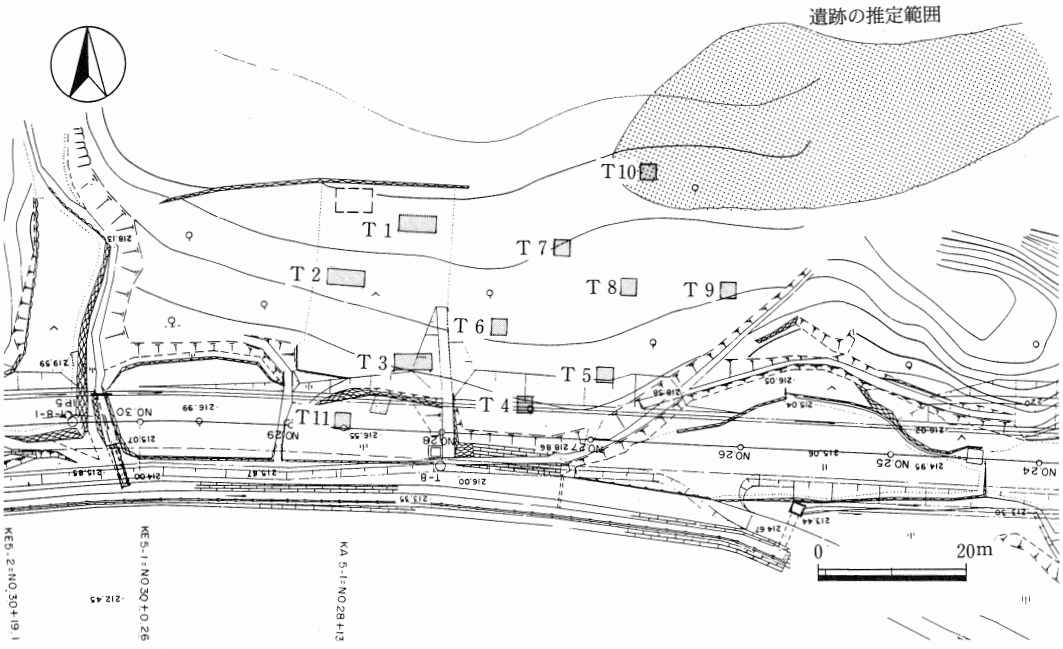
第４節　調査内容

調査は、石棒出土地を中心に、工事図面等も参考にし、台地上の畑地にまんべんなくトレンチ11本（５ｍ×２ｍ、２ｍ×２ｍ）を設定して行った。

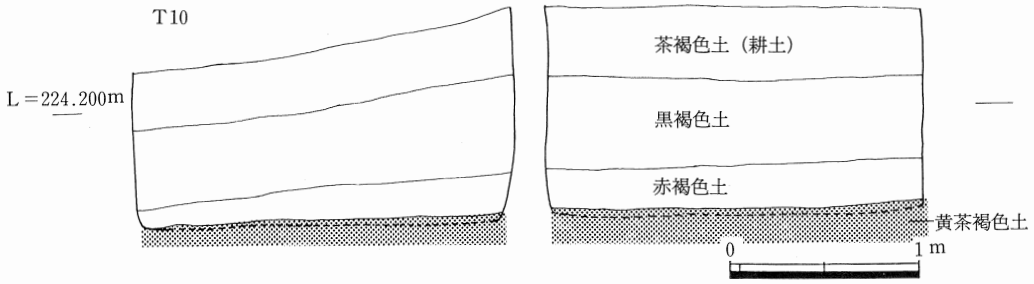
いずれのトレンチからも遺構を検出することができなかった。遺構面とみられる茶褐色砂礫層が、果樹園造成の際に、壊されたものと思われる。土層堆積状況は、基本的に表土（茶褐色土）黒褐色土、赤茶褐色土（砂まじり）、黄茶褐色土（地山）の順であった。

石棒出土場所に設定したＴ４から須恵器片が、一番北側山よりの台地上に設定したＴ10より縄文土器片を検出した。

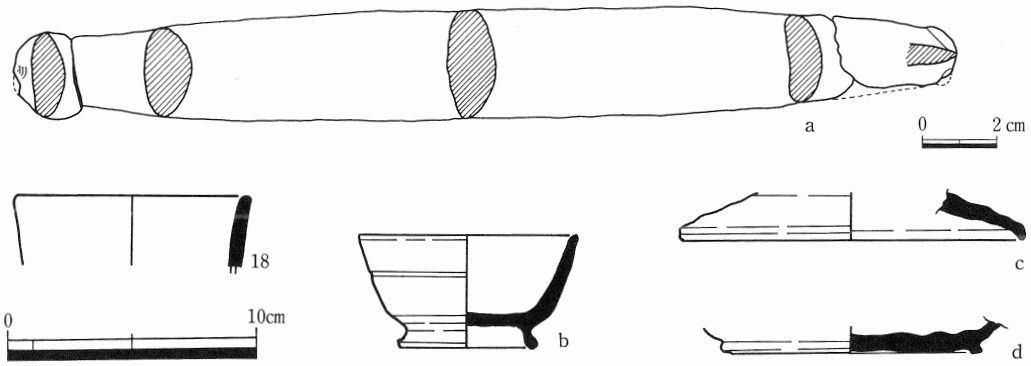
遺跡の推定範囲は、Ｔ10より北東方向へ奥へ入った台地上の樹園地より土器が出たという事も聞き、その周辺に及ぶものと思われる。



第15図　イヤノ谷遺跡トレンチ配置図



第16図　土層断面図



（2は鳥取県立科学博物館『郷土と科学第13巻第2号』1968より、b、c、dは佐治村教委『大井3号墳発掘調査報告書』1982より）

第17図　イヤノ谷遺跡出土

遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	遺跡名(トレンチ)
1	甕(須恵器)	—	—	外面に2本の沈線。沈線の上下に波状文。	ナデ。	細砂を含む。	良好	内外面灰色 断面セピア色	寺のナル遺跡
2	蓋(須恵器)	18.4(復元)	1.5(残存)	端で大きくZ字状にカーブを描き、端部で下方へ屈曲させ段をなす。	ナデ。	細砂を含む。	良好	内外面灰色	貝尻遺跡
3	甕(須恵器)	15.6(復元)	5.4(残存)	口縁は外傾して立ち上がり、端部は丸い。	ナデ。	細砂を含む。	不良	内外面灰色	〃
4	甕(須恵器)	47.4	7.7(残存)	口縁は外湾気味に立ち上がり、端部は肥厚して丸い。	ナデ。内面頸部以下へラケズリ。	細砂を含む。	良好	内面灰色 外面暗灰色	
5	製塩土器	—	5.3(残存)	底部平底で、体部は外傾して立ち上がる。	内面は工具によるケズリ。外面はナデ。	細砂を含む。	良好	内外面赤褐色	〃
6	坏(須恵器)	—	3.7(残存)	口縁は内湾気味に立ち上がる。	内面ナデ。外面へラケズリ後ナデ。	細砂を含む。	やや良好	内面淡黄褐色 外面淡褐色	刈地鳥居原遺跡(17)
7	坏(須恵器)	—	1.9(残存)	底部平担。高台は直立し、端部平担。	ナデ。	細砂を含む。	良好	内面灰オリーブ色、外面灰黄色	〃(T3)
8	蓋(須恵器)	—	0.9(残存)	天井部平担。	内面ナデ。外面へラケズリ後ナデ。	細砂を含む。	良好	内外面灰色	〃(T10)
9	甕(土師器)		4.6(残存)	口縁は外傾して立ち上がり、端部は角ばる。	内面横方向のハケメ。外面カデ。	2㎜程の砂粘を含む。	良好	内外面褐灰色	〃(T7)
10	埦(土師器)		4.5(残存)	口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。	内外面ナデ。	細砂を含む。	良好	内外面赤褐色	〃(T7)
11	鍋(瓦質土器)		4.6(残存)	体部は外傾して立ち上がり、端部は角ばる。	内面ミガキ。外面ナデ。	細砂を含む。	良好	内面淡灰色 外面暗灰色	〃(T8)
12	深鉢(縄文土器)		6.4(残存)	体部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめ、内側にやや張り出す。1条の沈線で囲まれた区画内にRL縄文。	内外面ナデ。	2㎜程度の砂粒を含む。	良好	内外面茶褐色	葛谷遺跡
13	石鏃	長さ 2.2	最大厚 0.4	ほぼ2等辺三角形を呈し、抉U字状。側縁部はほぼ直線。	—	石材 無斑晶安山岩	—	青灰色	〃
14	甕(弥生土器)	—	7.9(残存)	体部は内湾し、口縁は外傾して立ち上がり、二重口縁状を呈す。口縁に櫛描平行沈線、肩部に波状文。	内面ナデ。頸部以下セラケズリ。外面ナデ。	1～3㎜石英を含む。	良好	内外面黄褐色	〃
15	深鉢(縄文土器)	—	12.8(残存)	口縁は大きく内湾する。外面に沈線で矩形、楕円形、弧、二重圏などが施される。	内外面ナデ。		良好	内外面暗褐色	〃
16	甕(土師器)	24.7	32.7	外反する二重口縁で端部は丸い。屈曲部の稜は鋭く、下垂しない。幅広の口縁部外面は施文しない。	内面頸部以下へラケズリ。外面タテ、斜め方向のハケメ。	砂粒を含む。	良好	内外面灰褐色	〃
17	坏(須恵器)	—	1.9(残存)	底部平担。体部は外傾して立ち上がる。高台は底部の境よりやや内側にとりつき、端部は担。	内外面ナデ。	細砂を含む。	良好	内外面灰色	〃
18	壺(須恵器)	—	2.7(残存)	口縁はほぼ直立。	内外面ナデ。	細及を含む。	良好	内外面灰色	イヤノ谷遺跡

第５章　まとめ

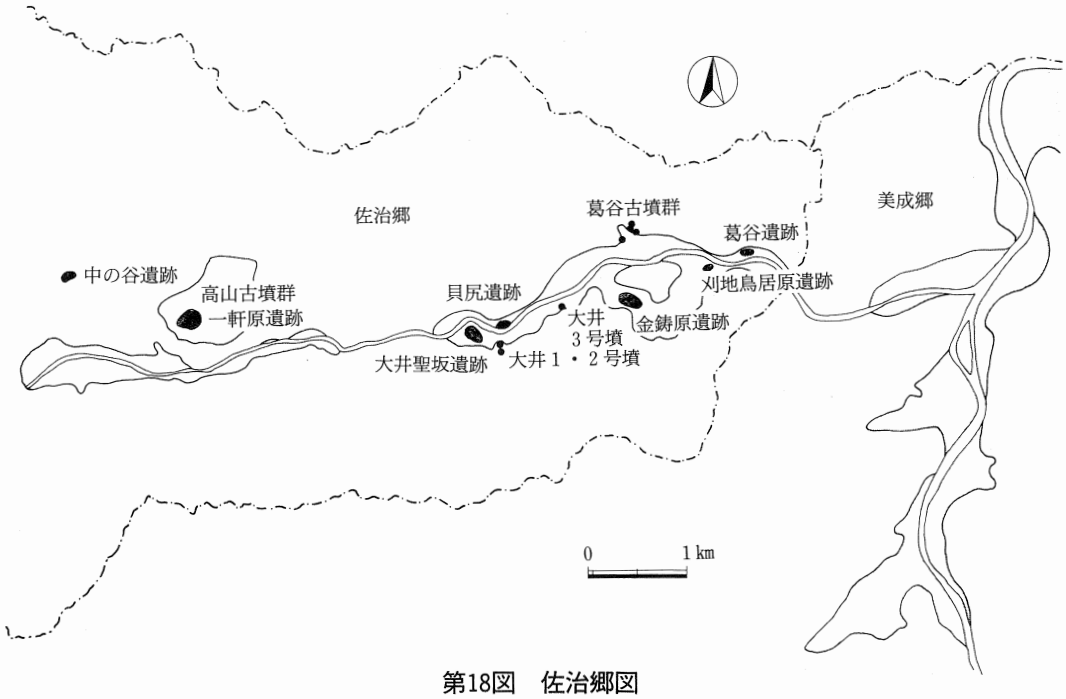
第１節　奈良時代の佐治村

佐治村は、東西に長い馬蹄型山地に囲まれ、佐治川流路沿いに谷底平野が発達している。この佐治村は、古くから独立した地域として存在していた。つまり、平安中期に編纂された「和名抄」によると、この地は、智頭郡の佐沼郷（沼は治の誤記とみられ以下、治と扱う）と記されている。今回、佐治村内遺跡調査が行われ、新たに同時期とみられる奈良時代の遺跡がみつかった。佐治村の地形を考えてみるに、山林が多く、耕地面積は少ない[註1]（水田230ha、畑437ha―1981年）。肥沃な穀物地帯ともいい難く、交通の要衝とも思われない。しかるに何故、独立した郷として存在していたのか。遺跡の多さ（3.5kmに奈良時代遺跡が５箇所ある）を頭に入れつつ、律令制を考える一助としたい。

まず、奈良時代を中心とした各遺跡概要を検討してみたい。葛谷遺跡は、佐治郷入口にあり、縄文時代から弥生、古墳、奈良時代とほぼ継続している。遺跡の大部分は、集落（39戸171人在中[註2]）宅地下にあり、遺跡推定範囲0.7haの小集落と考えられる。

刈地鳥居原遺跡は、佐治川南岸、葛谷遺跡の対岸に位置し、奈良、平安時代の集落とみられる。遺跡のすぐ南に刈地集落（49戸、214人在住）があり、遺跡推定範囲は、0.1haである。

金鋳原遺跡は、鳥居原遺跡の１km西方、北側に小丘陵、南側に山地を控えた盆地状の地形に位置する。遺跡は、弥生、古墳、奈良時代と続き、その推定範囲は３haである。

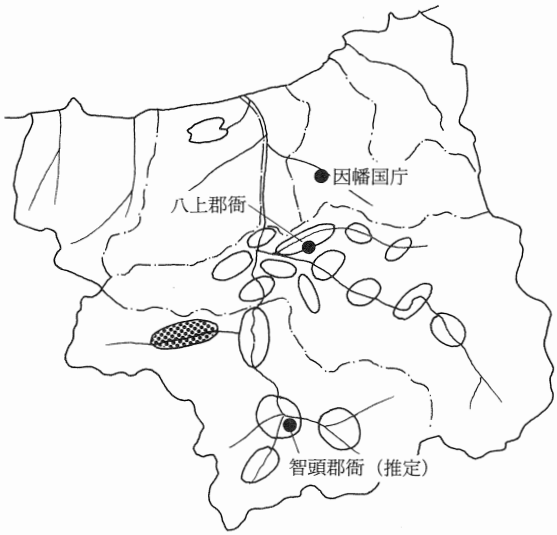


第18図　佐治郷図

大井聖坂遺跡は、佐治川南岸、佐治郷入口に開けた平野部の西端に位置する。遺跡は、弥生時代から始まり、古墳、奈良、平安、室町時代まで続く。遺跡推定範囲は、2haである。現在、川を挟んで北側に森坪集落がある（40戸174人）。

貝尻遺跡は、大井聖坂遺跡の対岸、北東側にあり、最近、奈良時代の須恵器、製塩土器（検討中）がみつかった。その推定範囲は、0.8haである。

中の谷遺跡は、佐治川北岸、標高460mの山腹中にある。果樹園開墾作業中に奈良時代の土器がみつかり、推定範囲は1haほどである。



第19図　因幡国郡配置 八上郡、智頭郡の郷

以上が奈良時代の遺跡であるが、古墳時代後期の遺跡も幾つか紹介しておきたい。寺ノナル遺跡は、古墳後期遺跡で、刈地鳥居原遺跡と金鋳原遺跡をつなぐ位置にある。葛谷古墳群は、佐治川北岸沿いの平野を見下ろす位置にあり、4基密集している。大井3号墳は、金鋳原遺跡と大井聖坂遺跡のほぼ中間にあり、弥生時代集落の上に立地している。大井1、2号墳は、大井聖坂遺跡のすぐ東側にあり、終末期の積石塚古墳である。このほか、一軒原遺跡群、高山古墳群は、佐治川中流域、段丘上にあり、3haほどの規模をもつ。

これらの遺跡の分布をみると、奈良時代集落は、ほぼ古墳時代に引き続き発展しており、その立地は、佐治郷入口（口佐治地区）平野部の東端、中央山側、西端にある。こうした遺跡の立地は何を意味するのだろうか。葛谷刈地鳥居原遺跡は、郷の入口、即ち交通の要所にあたり、大井聖坂遺跡、貝尻遺跡は、口佐治地区を見下ろす位置にあたる。特に、大井聖坂遺跡、貝尻遺跡は、狭い谷が急に開ける地形上の変換点にあり、水利の管理、灌漑用水の確保に重要な地点である。大井聖坂遺跡で規格性のある建物、墨書土器、丹塗り土師器を含む豊富な坏、椀類が出土している[註3]ことは、この集落の重要性を意味するのではないか。また、貝尻遺跡は、佐治川に面し、狭い平坦地に立地していることから、川辺に開けた集落、即ち、水運に関係した集落のようである。こうしてみると、佐治郷の奈良時代の遺跡は、谷底平野の東西両端をおさえ、かつ佐治川の氾濫の影響を受けない所に立地していたように考えられる。

ところで、中の谷遺跡は、前述の口佐治地区の集落からは、かなり隔ったところに立地し、また山中にあることから、とても集落遺跡とは考え難い。敢えて遺跡の性格について推定すれば、「資源開発の拠点[註4]」、「山居服餌の場[註5]」などが考えられる、前者について検討す

ると、山間地は、狩猟採集の場として大切だったことは疑いえない。しかし、山の利用価値はこれだけにとどまらず、木材、鉱物などの資源確保、治水の拠点としても重要であった。律令国家にとって、山林原野の支配開発は、重要な関心事で、奈良時代には、「山川藪沢の利は、公私共々にせよ」[註6]の政令が出されているほどである。律令国家にとって、大規模建築用の資材確保、製塩用燃料確保のための伐採[註7]は必要であったが、その一方で、伐開の制限も必要であった。つまり、農民の口分田＝「熟田」（現実に耕作されている水田）の保全[註8]のために、水源を保護しなければならず、山林に規制を加える必要があった。

次に山居服餌の場の意味であるが、奈良時代の「僧尼令」によると、僧尼が禅行修道に際して、俗人に交わらず、山居に服餌したいと願い出れば許可された。そして、こうした僧尼の閑居が山中に築かれ、山寺として残った。

中の谷遺跡は、当地では香泉寺跡の伝承[註9]が残るところでもある。伝説とは直接結びつかないにしても、何らかの奈良期の遺跡が立地していたことにより、伝説が残されたのではなかろうか。

再び、口佐治地区に戻り、佐治郷の実態を考えてみたい。古代村落として有名な御野国加毛郡半布里（岐阜県）大宝２年の戸籍[註0]によると、この地には、男451人、女465人、奴12人、婢11人が在住し、約120町の条里水田があったという[註1]。当佐治郷では、弥生時代以降の遺跡の立地する可耕地が、図面推定で、230ha（約228町―集落、畑地を含む可耕地）これを口佐治地区に限れば、132ha（120町）となり、半布里の面積よりも少なく、隣りの美成郷（用瀬町）よりもはるかに少ない。

ところで、口佐治地区の各遺跡の推定範囲から何戸（律令時代）の復元が可能であろうか。大井聖坂遺跡では、1400㎡の調査で同時期の建物４棟（住居２、倉庫２）が出土した。これを仮に１戸分とすると、２haの遺跡推定範囲内に14戸の復元が可能である。この方法（推定面積：平方メートルを1400で割る）で、各遺跡の戸を復元すると、貝尻遺跡（５）、金鋳原遺跡（21）、刈地鳥居原遺跡（１）、葛谷遺跡（３）の合計44戸となる。これは、50戸一郷とした当時の基準に比べ、やや不足するが、その分、佐治川中流域の高山地区にも集落があったとすれば、50戸の復元は可能である。また現在の口佐治地区の人口（982人）は半布里と同じようでもある。

律令時代の「戸」の設定について、実態説か擬制説か[註2]で意見の分かれるところである。佐治郷については、いわば強引に50戸を想定して、結論を導いてきているような気がするが、実態説が成り立つとすれば、その理由として、佐治郷の山地利用の価値が大きかったこと、河川の管理が可能だったこと、四周を山に囲まれた独立した地域だったことなどを挙げ、狭い地域ながら、人口を抱えて１郷をなし、律令国家体制を支えていたのではなかろうか。佐治郷の江戸時代の産物をみると、紙、麻、渋、漆、養蚕などがあり、山地資源

が豊富で、それを生かした産業も盛んなようである。佐治郷は、古代以来、しっかりした生活基盤を持ち得た地域であったのであろう。

（註１）　佐治村『佐治村誌』1983年

（註２）　同前掲書

（註３）　佐治村教育委員会『大井聖坂遺跡』1990年

（註４）　大林太良「山の生態系とシンボリズム」『日本の古代10山人の生業』1987年

（註５）　和田萃「大仏造立と神仏習合」『日本の古代第15巻古代国家と日本』1989年

（註６）　「雑令」国内条

（註７）　狩野久・木下正史「塩・鉄の生産と貢納」『古代の地方史第２巻　山陰・山陽・南海編』1977年

（註８）　西山良平「山林原野の支配と開発」『日本の古代10山人の生業』1987年

（註９）　註１前掲書に同じ

（註10）　児玉幸多他『地方史研究必携』岩波書店1976年

（註11）　奈良国立文化財研究所山中敏史氏の教示を得た。

（註12）　註１前掲書と同じ。

第２節　結び

刈地鳥居原遺跡では、ピット７基を確認したが、建物プランを確認するには至らなかった。出土遺物が奈良、平安時代のものであることから、佐治四郎遺跡とは別の約1,100㎡のごく小規模な集落遺跡であることが考えられる。

葛谷遺跡では、残念ではあるが遺構を確認することができなかった。しかし、遺物は縄文時代中期から後期の縄文土器、鏃、古墳時代の土師器、奈良時代の須恵器と各時期のものが出土し、縄文時代中期から後期、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良時代と以上３つの時期の複合遺跡であることが考えられる。

また、イヤノ谷遺跡でも期待に反して遺構を確認することができなかった。昭和42年に採集した石棒との関連を考えるよい機会であると、心を弾ませていたのであるが、少々残念な結果であった。遺跡は、予定より少し奥へ入った台地上に存在すると考えられる。

調査全体としては、少々期待はずれではあったが、刈地鳥居原遺跡を発見したことは大きな収穫であったと思う。

今年は大井聖坂遺跡の記録保存調査1,400㎡と、上記３箇所の確認調査と正に発掘調査漬けの１年であった。後半少々息切れし、乱雑な調査になりはしなかったかと反省をしている。

最後に、小雪のちらつく中再三足を運んでいただき、指導いただいた、埋蔵文化財センター田中精夫係長と中村徹文化財主事に心から感謝をし、お礼申し上げます。

図　　版

刈地鳥居原遺跡全景（西より）

イヤノ谷遺跡全景（南より）

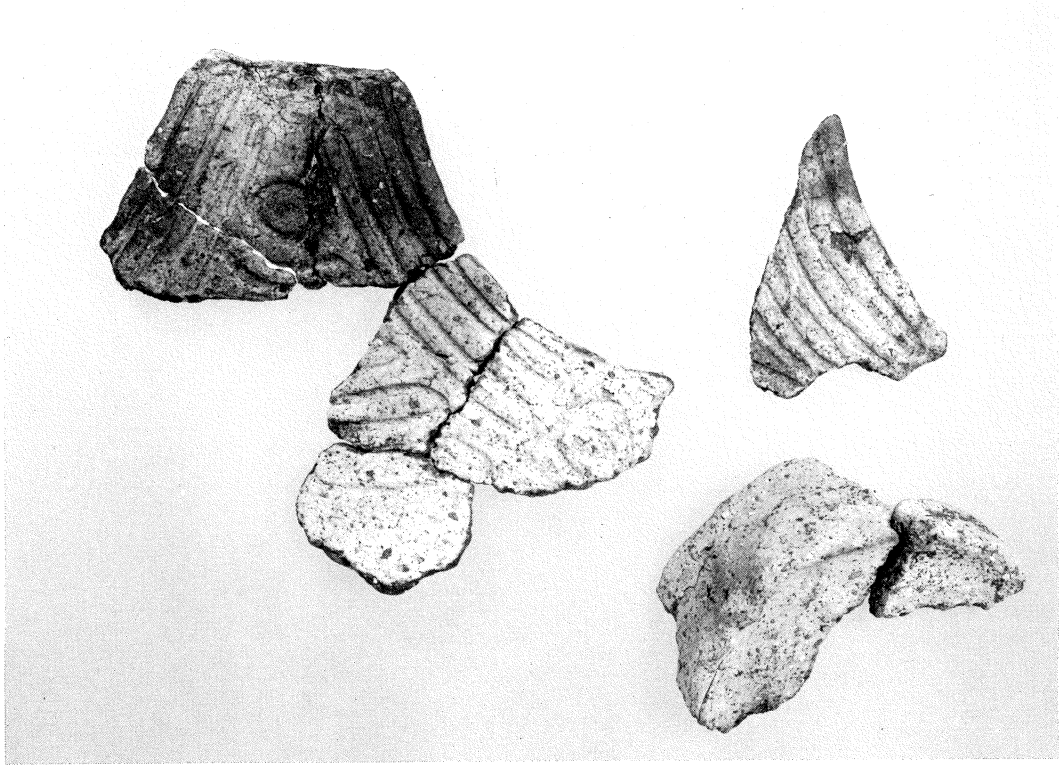
葛谷遺跡全景（北より）

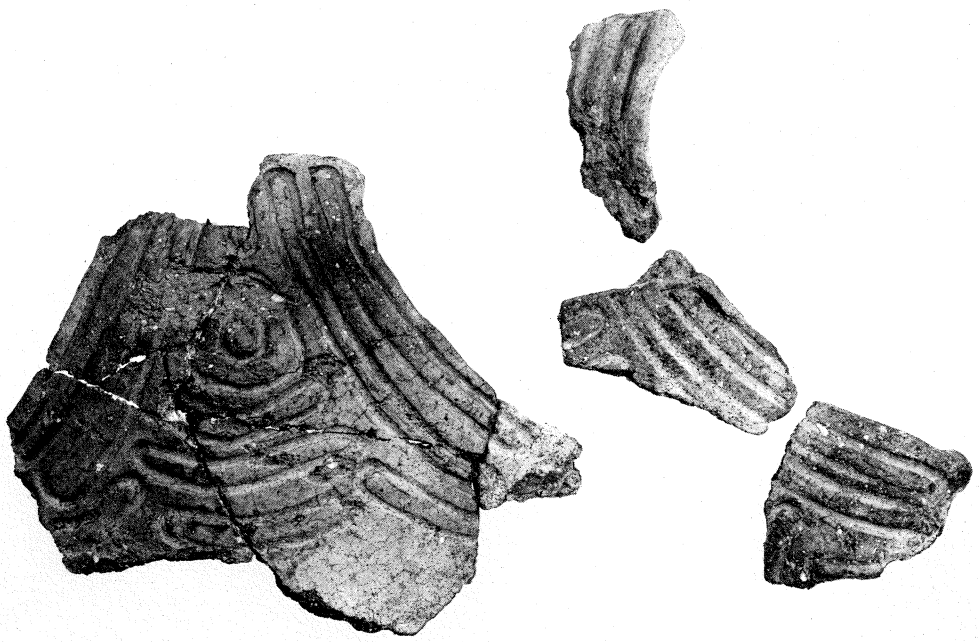
Ｔ６（東より）

Ｔ７（東より）

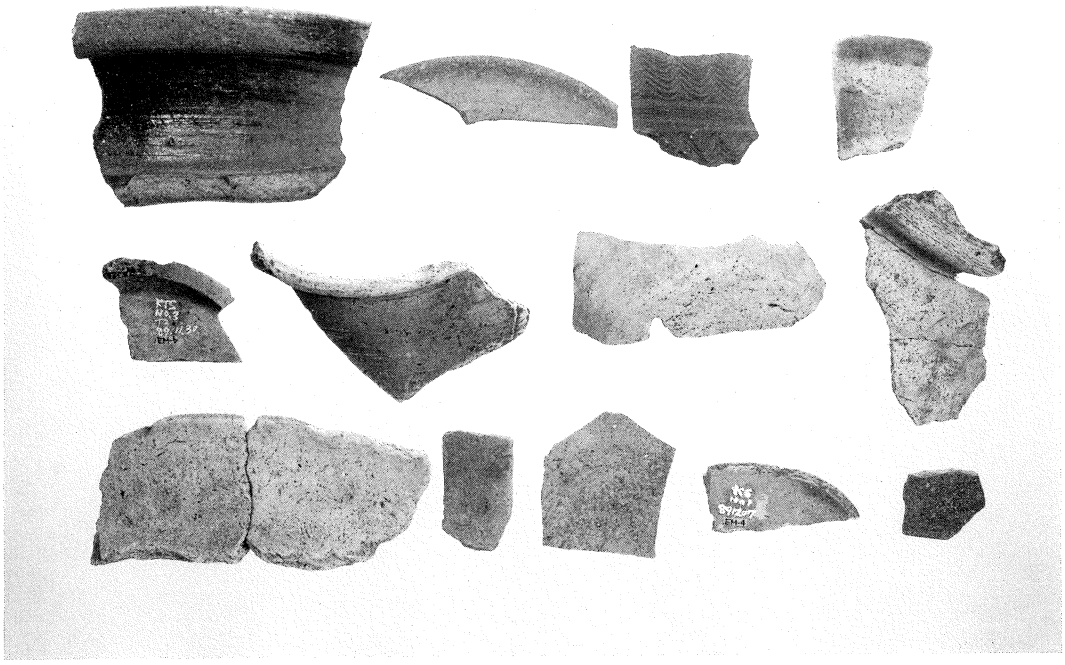
佐治四郎の墓所（東から）

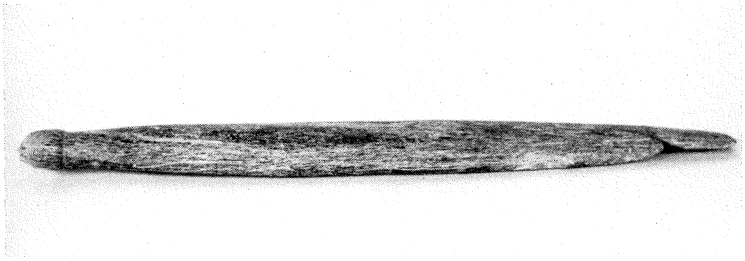
佐治四郎の墓所（北から）

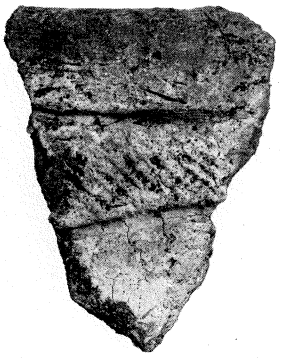




有文深鉢（縄文時代中期）







製塩土器・石棒・縄文深鉢・土師器

正　誤　表

（佐治村内遺跡発掘調査報告書）

頁	行	誤	正
1	18	犬段遺跡	大段遺跡
〃	22	金銭原遺跡	金鋳原遺跡
2	2	供膳土器	供献土器
5	11	灰茶褐色砂質土	灰褐色土
18	15	註0	註10
〃	16	註1	トル
〃	28	註2	註11
〃	33	産物をみると、	産物をみると、註12

佐治村埋蔵文化財調査報告書4

佐治村内遺跡発掘調査報告書

発　行　　平成2年3月
佐治村教育委員会

印　刷　　中央印刷株式会社